

☀️☁️☀️ 余市町でおこったこんな話 ☁️☂️☁️

余市町でおこったこんな話その154

余市町の埋もれた歴史等を紹介し、改めて余市町を再認識するコーナーです。

民家の調査と運上家

昭和45（1970）年、北海道内に古い民家がどれくらいのことっているかを専門家がくまなく調べている。大規模な調査がありました。成果として刊行された報告書には、道内の農家10軒、商家等13軒、漁家65軒が報告され、余市町内では運上家を含む3軒が掲載されています（『建造物緊急保存調査報告書』）。

文化庁によって同37年から全国的な民家調査が始まり、北海道では北海道教育委員会が主体となつて行われ、北海道大学工学部の越野武助教授はじめ、北海学園大、室蘭工大、道内の道立工業高校の先生など15名の調査員によって、範囲の民家が調査され、建物の重要性が明らかにされました。

「50年くらい前までは、多数の番屋が日本海岸に沿って建っていたから、地元のみならず、道内のある年齢層以上の人々にとつては、かなり身近な存在」だった古い民家が、「急速に失われつつある。この状態が続いたら、10年となく、5年で重要なものがなくなってしまう」と、報告書から昭和40年代当時の危機感がわかりま

す。この調査によって運上家、江差町の中村家住宅、函館市の太刀川家住宅、伊達町（現在の伊達市）の三戸部家住宅の5件が重要文化財に指定されました。

今では一般に公開されている運上家ですが、修復工事前は老朽化がはなはだしく、雨漏りや強風、雪の重みで痛みが進み、投石で窓ガラスが割られるなど心無いいたづらもあつて、工事の直前には倒れてもおかしくない有り様だったと伝わっています。同46年3月30日の新聞に「余市のモイレ運上家 文化財指定を申請 あす教育長が上京」の見出しとともに大きな記事が掲載されました。それによると前述の古民家調査によつて、余市町の運上家が北海道で唯一のこつたものであることが確定し、国の重要文化財指定が急がれました（古平町にもこのつていました。大きく改築されていきました）。記事には「現在の建物には六世帯の人が入居しており、土地、建物の買収費のほか、この人たちの補償の問題もあつて、復元費も含めて二千五百万円は必要」とあります。

運上家は地元関係者の努力が実に実り、同46年12月28日に重要文化財に指定され、修理工事の計画が立てられました。が、オイル

ショックによる国内の経済悪化に遭遇したため工事はすぐに始まり、5年後の同51年度から4年を費やして現在の姿になりました。同54年の『ひびけ』には、工事の最終年度のころのことが記されています。「：復元工事は既に外装はおおかたできています。一本の柱、一枚の板の扱いが丹念に造作されて、文化財というものの重みと共に全盛期の余市の漁場をとりしきつた運上家の権勢がしぼられる。：中略：私の子ども頃（昭和10年代）、モイレに海水浴にいったときは、この運上家の井戸でのどをうるおしたものであつた。冷たい、ひどくうまい水で、とうてい今の水道の水より知らない人には説明できないような水であつたのを思い出す」



▲修理工事前の運上家（昭和40年代）

この井戸は修理工事の際に一緒に保存されましたが、湧水は少な

夏山の遭難防止 ～山登り体力・技量を考えて～

山の雪解けとともに、登山やハイキングなどで山に出かける機会が多くなります。山岳遭難を未然に防ぐため、次の点に注意しましょう。

- 登山は十分な装備とゆとりある計画を立て、自分の体力や技量にあった登山に心がけましょう。
- 登山計画書を作成し、家族や職場のほか、最寄りの警察署や交番・駐在所にも提出しましょう。
- 経験のあるリーダーのもと、複数人での登山に努め、単独での登山は控えましょう。
- ヒグマとの遭遇を避けるため、音の出るものを携帯しましょう。
- 万が一のために、携帯電話などの通信手段を携帯しましょう。

◆問合せ 余市警察署 ☎22-0110

水道・下水道課からのお知らせ

本町の下水道事業及び水道事業では、将来に渡って、安定的に事業を継続させていくため、次の計画を策定しました。

- ・「余市町公共下水道事業経営戦略」
- ・「余市町水安全計画」
- ・「余市町水道施設耐震化計画」
- ・「余市町水道事業経営戦略」

これらの計画は、町ホームページでご覧になれます。

◆問合せ 水道課 ☎21-2130
下水道課 ☎21-2129